



石磨き大会の様子



自然豊かな清流にしか生息しないといわれる「かじか」



持続可能の キーワードは「地域の家督」 ～下内野4WD計画～

岩手県 一関市

【取材・文：永井 晃】

「名は体を表す」の格言通りネーミングは重要だ。有明海の干潟を会場に開催する運動会を「ガタリンピック」と命名した例など、優れた取り組みには、言い得て妙の名が冠されることが多い。今回紹介するのは、岩手県一関市しもうちのの下内野自治会による地域振興の取り組み。その名を「下内野4WD計画」と呼ぶ。通常4WDとは4輪駆動車の略語で、雪道や悪路などの走破性の高い自動車のこと。しかしここでの4WDは、4=老若男女、W=Water(水)、D=Dream(夢)を指す造語の意を含めて命名された。過疎・高齢化という社会的悪路を走破するために下内野自治会が策定した4WD計画の中心人物たちにお話を伺った。

下内野4WD計画を柱に

一関市街から車で約45分。山深い中山間地に下内野地区はある。世帯数42、人口104人の小さな集落だ。人口の半数を65歳以上の高齢者が占める。人口減少と過疎高齢化はいまや東京以外、日本中すべての町の共通課題となっている。下内野地区では約40年も前に地域課題の解決に向けたプラットフォームが形成されていた。発足は昭和

53年、その名は「モツ会」。もともと集落の畜産農家が和牛の子牛を市場に売ったお祝いに酒を酌み交わしたのが始まり。焼肉の香りに誘われて徐々に参加者が拡大。13,000円の会費を徴収し、毎月1日に月例会を開催。「モツを食べ、酒を飲みながら腹を割ってとことん語り合う」意見交流の場として現在も運営が続いている。会員制の「居酒屋モツ」は500円負担すればだれでも参加可能。勝部一関市長

や市職員も集落のメンバーとモツ焼きの鉄板を囲み議論に花を咲かせるという。毎回あまりの盛り上がりで、日付変更線を越えること



会員だけでなく、市長や市の職員もゲスト参加するモツ会



とにかく前向きで明るい下内野の人々

も度々。『1夜は早く寝るのがいいわ。1時、2時まで起きていると、明日の仕事に無理がくる』というモツ会小唄まで生まれてくらしいだ。居酒屋モツでは様々な地域の話題や課題が議論され、その対処療法が発案されていった。

その一つが下内野4WD計画だ。地域のファーストカーである軽トラックになぞらえて、前輪が定住人口の倍増と交流の拡大など。後輪が住環境の充実と産業の振興。ドライバーは自治会員、助手席には青少年、荷台には将来の夢を満載と念入りだ。定住人口の倍増策としては、全世帯宅地分譲や山林分譲などを掲げている。交流拡大策は、石磨き大会の開催、日本大学との交流、田舎教授派遣、居酒屋モツの建設など。住環境の充実策は、上下水道の整備、田植え踊りの伝承、ふれあい会館の整備。最後の産業の振興は、ほ場整備のほか作業受託組合の設立。この4輪を稼働させることで、地域の持続的発展を目指そうというものだ。

素敵な下内野定住生活

過疎・高齢化が進展する集落にとって、新規定住者を確保することは最重要課題だ。若者定住で持続可能な地域環境を作り出すことは農村集落共通の目標でもある。もちろん下内野でも、新しいパートナーとなる都市住民を受け入れるため

の定住促進の取り組みを展開している。『全世帯宅地分譲』事業がそれ。全自治会員に宅地や農地の提供を呼びかけた。分譲地と聞くと団地的に造成されたものを想像するが、下内野の分譲地は団地化されていない。つまり、集落内に点在する分譲地。名付けて『散居式現状分譲』という。さらに定住者に媚びない定住住民審査制度も設けている。定住してくれる人ならだれでも大歓迎となりがちな過疎地であって「豊かな自然環境と価値観を共有できる人」とした仲間入りのための意思確認を行っている。定住者から住んで仲間になりたいと思ってもらえる、いわば選ばれる集落であるべきという誇りが感じられるエピソードである。全27区画を分譲し6区画が契約、うち4世帯が定住して下内野での生活をスタートさせている。

定住歴16年の米塚陽子さんは「もともと田舎での生活を求めていた。下内野が散居分譲を始めたことを新聞で知り、主人と現地に来て、定住を即決しました」。下内野の印象を尋ねると「定住して16年が過ぎたが風景も人も当時と何一つ変わらない。何よりも村人の前向きさが素敵です」と話してくれた。大森千代美さんは一関市の空き家バンク物件を通じて1年半前にご主

人と共に下内野の住民となった。「風の音、川のせせらぎ以外に音のない世界だと思った（笑）。最初は不安だったが今ではそれが心地よくなりました」。大森さん夫妻は農林業で生計を立てることを目標に定住された。現在、ご主人は学校講師の傍ら農地を借り各種作物の栽培を試み自主研修中。千代美さんは集落の田植えに草刈に引っ張りだこの忙しさだ。「本当に良い人に来てもらった」と集落の評価も高い。結の関係が絆に変わりつつあることを実感した。

石磨き大会を交流ツールに

地域内に日本大学農獣医学部（現生物資源科学部）のセミナーハウスがあったことから交流が芽生えた河野英一日本大学教授の提案で、平成6年に『第1回石磨き大会』を開催。この催しは、砂鉄川を再びかじかの棲むことのできる清流に戻すことが目的。毎年8月に大学生と地元住民約100人が参加。特製の古縄たわしを手にとり砂鉄川に入り川底の石を約300メートルに渡って磨くというもの。石に付着した有機物が洗い流され、同時に石の下に酸素を送り込むことで川が清流に戻る効果がある。回を重ねて23回となる。参加学生のうち女性



草刈以外はすべて満足と下内野暮らしを語る米塚さん



移住1年半で集落からいないと困る人と言われるようになった大森さん



日本大学の学園祭で教壇に立つ下内野自治会員

は集落に農家民泊。男性は『ふれあい会館』に合宿。それぞれ地域の皆さんと内容の濃い交流を展開している。学生たちにもこの体験は琴線に触れるものとなっているようで、手紙のやり取りや石磨き大会へのOB、OGとしての参加をはじめ、結婚式に招待された例もあるという。この大会は交流と共に、河川環境の大切さを学び水質保全に対する意識の高揚にも一役買っている。これらの取り組みによって、砂鉄川に生息するかじかの数が増えてきたことを実感するまでとなっている。

もう一つの特徴的な取り組みが『田舎教授の派遣事業』だ。都会の学生が田舎に来て体験をするだけでなく、地域の人々が都会や大学に出向いて、自分たちの生活や文化・暮らしの様子を伝える場がなければ、一方通行の交流になってしまう。この理念のもと、集落から大学に働きかけて平成5年から継続しているのがこの事業。テーマは、講師となる住民が自らの知識や体験を基に設定することから多岐に渡る。餅文化論や乳製品の製造技術、郷土料理教室など様々だ。講師となった住民らは『最初は大学



石磨き大会を通じてかじかが棲む川になってきた砂鉄川

生相手ということもあり緊張したが、終わってみれば「あっ」という間だった。』と満足度も高く、4度、5度と教壇に立つ猛者もいるそうだ。講義だけでなく、学生と一緒に餅をついたり、料理をしたりするなど体験型の授業ということで学生からの評価も高い。

荷台にはでっかい夢を満載

清流砂鉄川の上流に位置する下内野集落。過疎と高齢化が進む典型的な中山間の集落にあって、住民が一丸となって地域づくりに取り組んできた。下内野4WD計画では荷台には大きな夢を満載と書かれている。ここまで下内野自治会の取り組みは順風満帆で進んできた。当然長い歴史の中で、壁に当たる場面や意見の違いなど紆余曲折はあったことだろう。それでも定住者の米塚さんが話されていたように、とにかく話を伺うすべて

の人から後ろ向きな発言が一切ない。そこが、下内野自治会の最大の強みと感じた。地域づくりの3つのキーワードの一つに『今がラストチャンス』というものがある。危機感を認識することが地域づくりには何よりも重要だ。ゆでガエルにならない敏感さと感性がこの集落には根付いているのだろう。環境保護活動に対し平成13年には国土交通大臣表彰を、平成22年には環境大臣表彰を受賞、本年2月には総務省のふるさとづくり大賞を受賞するなど、全国的にも取り組みは評価されてきた。今後は将来につなげていく『地域の家督相続』をどのように進めるかが課題といえる。そのために「ポスト4WD計画」の策定と後継者の育成、株式会社による農業法人への移行などを実行していく必要がある。集落にとっての課題を解決することが夢だとしたら下内野集落から夢が尽きることは今後もなさそうだ。

一関市はこんなまち



一関市は、岩手県の南端に位置する人口121,583人、面積1,256平方キロの県内第2の都市。高速道路や新幹線に直結する恵まれた交通環境にあり、新幹線を使えば日帰り交流圏でもある。気候は県内では比較的温暖。特産品は曲りねぎ、南部一郎かぼちゃ、いわて南牛など。世界遺産「平泉」、天然記念物「厳美渓」、日本百景「狹鼻溪」など景勝地も多い。また、ILC(国際リニアコライダー)の建設候補地として注目されている。